

方向を表す介詞“往”

—“向”“朝”との比較から—

保坂律子

0. はじめに

現代中国語の介詞“往”、“向”、“朝”は、意味上「方向を表す介詞」に属するとされ、しばしば同義の介詞グループとして説明される。一般的語法書¹⁾での解釈は、概ね次のようにまとめることができる。

“往”：動作の方向を表す。基本義は移動にある。

“向”：動作の方向を表す。基本義は方向を表すことにある。
動作の対象を表す。

“朝”：動作の方向を表す。基本義は面と向かうことにある。
動作の対象を表す。

これら3つの介詞に共通の働き、すなわち動作の方向を表すという点で互換可能な例として、語法書によく引用される例を見てみよう。

1) 往前走 向前走 朝前走

1)' 往后走 *向后走 ?朝后走

1)で見る限り、確かに3つの介詞は互換可能である。ところが“前”と文法的に同一性質を備えた“后”を介詞の目的語とすると1)'では状況がちどころに変化する。この事実は、従来意味面から説明されてきた3つの介詞のニュアンスの違いだけでは介詞の機能を律しきれないことを意味する。

介詞は文中で単独で用いられることはない。その性質は共に用いられる動詞や介詞の目的語と切り放して論ずることはできない。本論は、特に介詞と結びつく動詞、目的語の文法的性質の違いに着目し、“往”の機能に焦点をあて“向”、“朝”と比較しつつ介詞“往”の機能を考えるものである。

1. “往”と結びつく動詞, 目的語

“往”と結びつく動詞についての記述は楊淑璋1990 (p. 153) ““往”构成的介词结构所修饰的动词, 表示的动作, 都是运动状态的”, 刘淑娥・冬慧君1983 (p. 36) “用于人或物对着某个方向移动位置”, また目的語については吕叔湘1980 (p. 482) “必须跟表示方位, 处所的词语组合, 不能直接跟指人或物的名词”があげられる。すなわち, 動詞は

- ①動詞が表す動作はみな運動状態で,
- ②人やものがある方向に位置を変えるのに用い,

目的語は

- ③方位や場所を表す語句でなければならず, 直接人や物を表す名詞と結びつくことはできない

のである。しかし, これらの条件は“往”と結びつく動詞の必要条件ではあるが, 十分条件ではない。①, ②, ③をすべて満たした動詞, 目的語であっても“向”, “朝”と共起することは1) “往前走”, “向前走”, “朝前走”で見たとおりである。そこで本論では, 3つの介詞と結びつく動詞, “往”とのみ結びつく動詞の文法的性質等を探りつつ“往”の機能を検討していくことにする。

1.1 動詞の静態と動態

論を進めるにあたり, まず動詞の動態と静態²⁾という概念についてふれておく。動詞によって表される動作は, 動作がdynamicであるものとstaticなものに区別できる。動態とは動作が動的(dynamic)であるものを指し, 静態とは動詞が表す動作が静的(static), すなわち動作の結果で表される状態を指す。現代中国語の単音節動詞のいくつかは, 同一動詞で動作そのものを表すことも, 動作の結果の状態を表すこともできる。例えば, 動詞“坐”, “放”などがあげられる。

	動態	静態
坐	すわる	すわっている
放	置く	置いてある

方向を表す介詞“往”

次の2)3)でaは動態を、bは静態をそれぞれ表している。

- 2) a. 你坐在这儿吧。(あなたはここにお座りなさい) ……動態
b. 我坐了一个小时。(私は一時間座っている) ……静態
- 3) a. 这个东西放在哪儿才好呢？(どこに置けばよいですか?) …動態
b. 报纸在桌子上放了三天。(三日間置かれている) ……静態

これら同一動詞で動態と静態を持つ動詞は、いずれも[アスペクト助詞“了”+時量補語]を伴った場合、動作の結果の状態(すなわち静態)の持続時間を表し、動作の持続は表さない³⁾、という特徴を持つ。2) bの時量補語には「座る」という動作の結果「座っている」状態の持続時間を、3) bでは「置く」という動作の結果「置いてある」状態の持続時間を表す。

これら動態・静態を持つ動詞は動作の受け手目的語の有無により、受け手目的語をとらない“坐”タイプと受け手目的語をとる“放”タイプの2タイプに下位分類可能である。“坐”タイプは、“表示人或动物所处状态”(人や動物の在り方のありさまを表す)動詞で、主体が移動する動詞“坐、站、躺、跪、蹲、钻”などがあげられる。“放”タイプは“表示物体置放状态”(物の放置の仕方を表す)動詞で、受け手が移動する動詞“放、贴、摆、摆、扔、塞、挂、倒、装”などがあげられる。

1.2.1 同一動詞の動態・静態を明らかにしたところで、“往”とのみ結びつく動詞について見てみよう。

- 4) a. 得闲儿了，往屋门口一坐，没有三俩儿人凑在身边听着，…
b. *得闲儿了，(向/朝)屋门口一坐，没有三俩儿人凑在身边听着，…
- 5) a. 你往门口站！
b. *你(向/朝)门口站！

“往”は4) a, 5) aのように“坐”タイプ動詞と結びつき動態を表すが，“向”，“朝”は動態を表す“坐”タイプ動詞とは結びつかない。

- 6) a. 乡女端着空碗进来，往柜上放。
b. *乡女端着空碗进来，(向/朝)柜上放。
- 7) a. 我喜欢往红茶里放些糖。
b. *我喜欢(向/朝)红茶里放些糖。

また、“往”は6)a, 7)aのように“放”タイプ動詞とも結びつき動態を表すが、“向”、“朝”は動態を表す“放”タイプ動詞と結びつかない。

8) a. 自己往脸上贴金, 多不好意思!

b. *自己(向/朝)脸上贴金, 多不好意思!

比喻としての使用例8)“脸上贴金”「顔に金箔を貼る→見栄を貼ること, 自分をよくみせようとする事」の“放”タイプ動詞も, 6), 7)同様に“往”とは結びつくが“向”、“朝”は結びつかない。

4)~8)から動態・静態を持つ動詞が動態を表す時には“往”とのみ結びつくことが分かる。この時4)~8)いずれも“往”フレーズの目的語は動詞で表される動作の結果の主体の移動先, 到達点(“坐”タイプ動詞), あるいは受け手の移動先, 到達点(“放”タイプ動詞)であることに気付く。例えば4)では「座る」という動作の結果, 主体の移動先が“屋门口”である。同様に5)では立つという動作によって立った先が“门口”である。6)では“空碗”は“放”「置く」動作によって“柜上”に移動し, 7)は砂糖の到達点が“红茶里”である。すなわち“往”とこれらの目的語によって構成される“往”フレーズは, 単なる動作方向にとどまらず, 動作の結果の移動先までをも含む方向を表すことになる。

“坐”タイプ動詞, “放”タイプ動詞で表される動作は時間軸上で線状の運動ではない。すなわち時間軸上の任意の時点において同一形態の動作を表さない。“坐”であれば時間軸上で“坐”の開始から終了までの動作の流れがあり, その形態は時間軸上で変化し, 均一な形態の動作ではない。またこれらの動詞は語義上からは, 動作による移動の結果に着目する動詞である。以上から動作の結果の移動先までを含む“往”フレーズの表すものは, 時間軸上の任意の時点での動作方向ではなく動作全体を包むもの, すなわち時間軸上で動作をトレースするような方向であると言うことができる。

1.2.2 “往”とのみ結びつく動詞には前節であげた“坐”タイプ, “放”タイプ動詞のほか, 物や人を送る意味を持つ動詞“送、寄、运”などがある。これらの動詞も“向”、“朝”とは結びつかない。

9) a. 她端出一小盆杂合面来, 往丁四屋里送。

方向を表す介詞“往”

- b. *她端出一小盆杂合面来, (向/朝) 丁四屋里送。
- 10) a. 按理说我应该赶快把他往公安部送, 可是我却把他带了连部。
b. *按理说我应该赶快把他 (向/朝) 公安部送, 可是我却把他带了连部。
- 11) a. 往报社寄稿件。
b) *(向/朝) 报社寄稿件。

動詞“送、寄、运”は、同一動詞で動態・静態を持つ動詞ではないが、いずれも物や人を送る意味を持ち、送り先である受け手の移動先と縁の深い動詞である。また語義上から動作による移動の結果に着目する動詞である。この点で“放”タイプと通じ、“往”の目的語は受け手の移動先、到達点を表している。9) aの“丁四屋里”は、“一小盆杂合面”の届け先、すなわち到達点であり、10) a“公安部”も“他”をしょっぴいて行く先、すなわち移動先であり、また11) aの“报社”は“稿件”の到達点である。ここでも“往”フレーズは単なる動作方向にとどまらず、動作の結果の移動先までを含む方向、すなわち動作全体を包む方向を表していることが分かる。

ところで“往”の目的語はすでに③で述べたように、方位や場所を表す語句に限られるわけであるが、いままで見てきた“往”とのみ結びつく“坐”タイプ、“放”タイプ動詞、“送”タイプ動詞は移動の結果に着目する動詞と言い得、“往”の目的語には移動先たりうる場所語句、多くは具体的な場所を表す方位フレーズや場所詞をとる。それゆえ方向を示すにとどまる単なる単純方位詞とは共起しない。次の例を見てみよう。

- 12) a. *你往前坐吧!
b. 你往前边儿坐吧!

12) aのように、具体的場所でなく方向を表す単純方位詞“前”を目的語にとった“往”フレーズは動詞“坐”と共起しない。しかし合成方位詞“前边儿”であれば場所を表し得る。12) bは、たとえば遠慮して後ろの方の席に座ろうとしている相手に対し、前の方の席に座ることを勧めるという文脈で使われ、この場合“前边儿”はもはや方向ではなく「前の方の場所」と話者は具体的な場所を意図して用いているゆえ、“坐”と共起するのである。

1.3 3つの介詞とも結びつく動詞

前節1.2で取り上げた動詞は“往”とのみ結びつく動詞であり，“往”の目的語は移動先を表した。ここでは3つの介詞いずれとも結びつく動詞について考察する。

3つの介詞と結びつく動詞として、まず動作の持続を表し得る動詞を扱う。“坐”タイプ，“放”タイプ動詞は[アスペクト助詞“了”+時量補語]で動作の結果の状態の持続を表す動詞であるのに対し、ここで取り上げる動詞は[アスペクト助詞“了”+時量補語]で動作の持続時間を表す動詞である。

13) 我走了一个小时。(私は一時間歩いた)

13)では、時量補語“一个小时”は“走”「歩く」という動作が一時間継続したこと、すなわち時量補語は動作そのものの継続時間を表す。このタイプの動詞をここでは“走”タイプ動詞と呼ぶことにし，“走、跑、飞、流、奔、爬、前进、迈步”などがある。この“走”タイプ動詞は“往”，“向”，“朝”いずれとも結びつく。

14) a. 我骑着自行车正往前走，迎面来了个老头儿，这真是个怪人。

b. 我骑着自行车正(向/朝)前走，迎面来了个老头儿，这真是个怪人。

ところで主体の移動を表す“走”タイプ動詞に対し，[アスペクト助詞“了”+時量補語]で動作の継続を表すが主体の移動は伴わず，目で見える動作を表す動詞“看、望、张望”などがある。これを“看”タイプ動詞と呼ぶことにする。

15) a. “谁？”她们走到窗前，趴在纱窗上往外看。

b. “谁？”她们走到窗前，趴在纱窗上(向/朝)外看。

この“看”タイプ動詞も15) a, bのように3つの介詞いずれとも結びつく。すでに1.2で見たように“坐”タイプ動詞と結びつく時量補語が表すのは動作そのものの継続時間でなく動作の結果の状態の持続である。従って時間軸上では動作そのものの相と結果の状態との異なる相を呈する。一方“走”タイプ，“看”タイプ動詞の動作の性質は，動作が持続可能な時間軸上で線状の動作である。すなわち時間軸上の任意の時点で同一形態の動作であり，時間軸上のどこで切っても金太郎飴のように同じ動作である。よって介詞フレーズが表す動作方向は常に同一動作方向である。この時，“往”の目的語には14), 15)のよ

方向を表す介詞“往”

うに方位詞も共起可能である。

1.4 目的語による介詞の制限

本節で扱う動詞は、3つの介詞と結びつき得るが“往”のみ結びつく場合と3つの介詞いずれとも結びつく場合に、介詞フレーズが表すものに意味上違いが表れる動詞である。

1.4.1 移動先か方向か——“推”類

“往”と結びつく動詞には、動作の受け手が移動しながらも移動先は必須条件ではない動詞“推、拉、扔、开…”がある。これら動詞の文法的特徴は、

①動作の受け手は移動するが、移動先提示は義務ではない

②動態・静態を持たない

の2点である。これら動詞は“往”の目的語に方位詞も場所詞もとり得る。しかし、単純方位詞の場合と場所詞の場合とでは“往”フレーズが表し得るものも、“往”と“向”、“朝”の置換状況も異なる。次の例を見てみよう。

16) a. 把帽沿往上一推，露出眼来。(移動先・方向)

b. 他把帽沿(向/朝)上一推，露出眼来。(方向)

方位詞は方向や相対的な位置関係を表す語であるが、16) aでは“上”は目が見えるために帽子のつばを押し上げる方向でも、目が見えるために押し上げる移動先でもある。この場合“往”フレーズが表す移動先と移動方向は不可分である。ところが“往”を“向”、“朝”で置換した16) bでは介詞フレーズは移動方向一義の解釈となる。すなわち介詞の目的語が移動先のみを表す場合には“向”、“朝”を用いることはできないことになる。次の例でみてみよう。

17) a. 二叔可不是成心往火坑里推你。(移動先)

b. *二叔可不是成心(向/朝)火坑里推你。

17) a “往火坑里推你”「おまえを泥沼に押しやる」では“火坑里”は“你”の移動先である。この場合には“向”、“朝”では置換不可能となる。

以上16), 17) から“推”タイプ動詞と“往”、“向”、“朝”について、次のようにまとめることができる。

① “推”タイプ動詞が受け手の移動先を意図する時、共起する介詞は“往”のみである。

② “推” タイプ動詞と結びつく介詞“往”の目的語が方位詞の場合，“往”フレーズは移動先，移動方向を兼ねる。

③ “向”，“朝”が“推”タイプ動詞と結びつく場合，移動方向のみを表す。移動先までを含む動作がよく表れている例をもう1例，挙げておく。

18) a. 没想到闺女听了，却撇了嘴，气夯夯地把手里的茶杯往桌子上一推，说…（移動先）

b. *没想到闺女听了，却撇了嘴，气夯夯地把手里的茶杯（向/朝）桌子上一推，说…

18)では“茶杯”「茶碗」は“手里的”「手にしている」のである。“推”は「推す」の意味であるから茶碗が手から“桌子”「テーブル」の上，すなわち移動先に置かれるまでの間は“往”フレーズが担っていると考えられ，ここでも“往”は動作の流れを表している。もちろんこの場合18) bのように“向”，“朝”での置換は不可能である。

1.4.2 動作量と受け手の移動

前節まで主に動詞と介詞の目的語の性質から“往”と“向”，“朝”について考察してきた。ここでは動作に受け手をとる場合，動作量と意味という角度から，“往”と“向”，“朝”の違いを考察する。

19) a. （向/朝）内探了一下头

b. *往内探了一下头

20) 康顺子提着个小包，带着康大力，往里边探头。

“探头”は頭を前に突き出す動作であるが，様子を窺うさまをも表す。ところが19)aのように“探了一下头”では“一下”「ちょっと」が頭を突き出す動作量を説明し，この時“（向/朝）内”は様子を窺う為に頭を突き出す方向を表す。動量補語“一下”を伴う19)aを“往”で置換した19)bは成立しない。前節1.4.1で「②“推”タイプ動詞と結びつく介詞“往”の目的語が方位詞の場合，“往”フレーズは移動先，移動方向を兼ねる」という結論を得たが，“一下”（ちょっと）と動作量の制限を受けると移動先を意図しにくく介詞フレーズは移動方向に傾くと考えられる。次の例で見てみよう。

21) a. 把饭碗（向/朝）前推了一下

方向を表す介詞“往”

- b. *把饭碗往前推了一下
- c. 把饭碗往前推了

21) aは「前にちょっと推した」を意味し,“(向/朝)前”は「前に」と方向を表している。この21) aの“向、朝”を“往”に替えた21) bは成立しないが,“一下”のない21) cであれば成立する。すなわち“一下”を伴った21) aは動作による受け手の移動方向を表すため“(向/朝)”を“往”で置換した21) bは成立しないが,“一下”のない21) cであれば1.4.1②の通り,移動方向とも移動先とも解釈可能で成立する。つまり動作に受け手があると“往”と結びつく目的語は受け手の移動先を指向すると言える。また,“往”の目的語が明らかに移動先を表す場所語句の場合,動量補語“一下”は共起しないことは言うまでもない。介詞の目的語“火坑里”が移動先を表す17) aに動量補語“一下”を伴った12) a'は成立しない。

17) a. 二叔可不是成心往火坑里推你。

a'. *二叔可不是成心往火坑里推你一下。

以上は“往”はある一時点での動作方向を表すのではなく,時間軸上で動作の流れを含む方向を指向することの傍証となるろう。

22) 往前看了一下

なお,22)のように動作に受け手がなく,動作が持続可能な“走”タイプ,“看”タイプ動詞と“往”が結びつく場合には,すでに述べたように“往”フレーズは方向を表し“一下”とも共起する。

1.5 方向と縁薄い動詞との共起

およそ方向を表す介詞と結びつく動詞は移動や方向と縁深いはずであるが,“往”と結びつく動詞には,“写、系、划、磕”のように移動や方向と縁薄い用例が観察される。

23) a. 他越想越烦,烟锅儿一个劲儿往鞋底上磕,震得脚掌子生疼。

b. *他越想越烦,烟锅儿一个劲儿(向/朝)鞋底上磕,震得脚掌子生疼。

23)の動詞“磕”は「ぶつける,打つ」意味を持ち,移動や方向とは縁遠い。ここで23)“往”の果たす機能は“往鞋底上磕”と“磕鞋底上”の違いから推

察されよう。すなわち“磕鞋底上”「靴の底をたたく」であれば“烟锅儿”「キセル」がどこにあらうがたたくことが描写の対象である。ところがキセルが手にした位置から“磕”するまでの空間的移動、キセルが“磕”の動作で靴の底に達するまでの全体の流れは“往”の使用により生ずるのである。同様の例を2つ見ておこう。

24) a. 小平平坐在床上，抓着一只红蓝铅笔，瞪着大眼睛，往一本书上划着道道儿。

b. *小平平坐在床上，抓着一只红蓝铅笔，瞪着大眼睛，（向/朝）一本书上划着道道儿。

25) a. （示以手中的红带，往腰上系）

b. *（示以手中的红带，（向/朝）腰上系）

24) では“往”は手に握りしめた赤青鉛筆が本まで移動し、そして本に線を引くまでの動作を表し、25) では“往”は手にした帯を腰にしめるまで、すなわち帯を手から腰に移す動作と腰にしめる動作までを表している。

以上からも“往”の機能は単なる動作方向を表すことではなく、時間軸上で動作全体を包み込む、すなわち動作のトレースをするような方向を表すことが見てとれ、この点で“向”、“朝”の表す動作の方向と異なるという結論が得られた。結びつく動詞が“走”タイプ、“看”タイプのように時間軸上でつねに同一形態の動作動詞であれば、動作の流れは一定ゆえ“往”フレーズは移動方向を表すが、それらのタイプ以外の動詞では動作に受け手があれば受け手の移動先を、受け手が無ければ主体の移動先を指向するのである。

2. 語用面からの考察

第1章では、主に介詞と結びつく動詞、目的語の文法的性質から検討を加えてきたが、ここでは語用面からのアプローチを試み、第1章で得た結論を補完する。

2.1 3つの介詞と方向の共起制限

3つの介詞はともに単音節方位詞を目的語にとるが、いずれの方位詞とも自由に結びつくわけではない。特に“后”については厳しい制限があるが、“往”

方向を表す介詞“往”

は“后”を自由に目的語にとることができる。

24) a. 他往后(走/跑)了。

b. *他(向/朝)后(走/跑)了。

24) では動詞“走”「歩く」、 “跑”「走る」で表される主体の動作方向と主体から見た“后”の方向は逆である。にもかかわらず24) aが成立するのは“往”が動作の流れ全体を包む方向、動作のトレースをする方向を表すゆえに“往后”は直線方向であることを要求されず、“走・跑”全体で弧を描くように移動して“后”へ位置を変えてもよいからである。一方、“向”、“朝”には動作の流れ全体を包む方向を表す働きがなく“走・跑”の動作方向と“后”の方向が相反するので不成立となるのである。

25) 路应该朝前走, 不应该朝后走。

なお、小説中で25)の“朝”が“后”と共起する例が見られ“向”、“朝”の差異を探る資となるが、紙幅の関係から本論では扱わない。

2.2 命令と号令

“往”は命令文中にも表れる。発話時以降の動作行為についてなら命令することができ、禁止の命令も可能である。

26) 一排上刺刀! 跟我往上冲!

しかし号令には“向”しか用いられない。

27) a. 向前走! 「前へ進め!」

b. *往前走!

号令で方向が問題になるのは隊列へ号令をかける場合である。号令はその場で一回限りの瞬時の命令として発せられる。このとき動作の流れは必要とされず、問題とされるのは方向だけである。ゆえに“往”は排斥されると考えられる。

2.3 「ここを殴れ!」

中国人は喧嘩の時、相手が手を振り挙げて殴りかかってきそうになると、自分の体を指して“往这儿打!”と言う。“这儿”は胸や顔であったり、お尻であったりする。しかし決して“*向这儿打!”, “*朝这儿打”とは言わない。またなぜ“打这儿”でなく“往这儿打!”と言うのだろうか。“这儿”「ここ」を表す

具体的な場所として“屁股”「お尻」を例に使用される場面から考えて見たい。

28) 打屁股

29) 往屁股上打

28) が使用されるのは、「お行儀の悪い子は、お尻ペンペンですよ！」や、「子どもが悪さをしたらお尻をたたくのが一番ですよ」といった場面である。すなわち「お尻をたたく」の日本語に相当する一般論としてコト化された言い方である。それに対し 29) は子どもが叱られている場面で、親が手を挙げて今にも殴りかかって来そうな時「ぶつならお尻にして！」と言う場合や、喧嘩で顔を殴らそうな時、相手に「顔は勘弁してくれ、シリにしてくれ！」という場面で使われる。すなわち、いずれも相手の手はすでに振り挙げられて、自分の体のどこかに届くことが前提になっていて、「お尻」という場所を提示しているのである。ゆえに相手が殴るそぶりも見せないうちに発話されるとおかしい。逆に殴られるのが分かっている時に一般的コトを表す 28) では間が抜けている。移動の意味が希薄な“打”でありながら、相手が挙げたその手が自分の体に届くまでの時間と空間を表現する働きは“往”の機能においては他にないと考えられる。

3. 結び

以上、“往”の機能について主に結びつく動詞の文法的性質、目的語から考察を加えた。その結果、“往”の機能は単なる動作方向を表すのではなく、動作の流れ全体を含む方向、動作のトレースをするような方向であることが明らかになり、語用面からもその機能を確認した。

“向”、“朝”の機能の違い等については本論では詳しく触れる余裕はなかったが、動態・静態を持つ動詞では、“往”が必ず動態と結びつくのに対し、“朝”は必ず静態を選ぶというような興味深い違い等が観察された。稿を改めて論じるつもりである。

〈注〉

- 1) ここでは《現代汉语八百词》、《現代汉语虚词例释》等をいう。
- 2) このタームは李臨定1990による。

方向を表す介詞“往”

3) 複文中に表れて〔了+時量補語〕で文が終止せず、うしろに分句が続く場合には、動態を表し動作の持続を表しうる。例えば次のような例である。

我貼了半天，(才把画贴好。)
「長いこと貼って、やっと絵を貼れた」
ただし、時量補語は具体的持続量を表すことはできない。

〈参考文献〉

- 呂叔湘1980《現代漢語八百詞》商務印書館
北京大学中文系 1955/1957 級語言班編《現代漢語虛詞例釋》商務印書館
劉淑娥・冬慧君等1983《近義詞辯釋》北京語言學院
王自強1984《現代漢語虛詞用法小詞典》上海辭書出版社
李臨定1990《現代漢語動詞》中國社會科學出版社
楊淑璋・徐玉敏1990《虛詞的應用》中國物資出版社
劉月華等1983《實用現代漢語語法》外語教學出版社
寺村秀夫1982『日本語のシンクスと意味Ⅰ』くろしお出版
日本語教育学会編1988『日本語教育事典』大修館書店
佐藤富士雄1978「前置詞“朝”，“往”，“向”の機能の差異について」『教育学論集』
郭春貴1986「表示動作方向的介詞“朝”，“往”，“向”的差異」『広島大学総合科学部
紀要』